ISSN 1349-7154

日本熱帯生態学会ニューズレター No. 86

Tropical Ecology Letters

日本熱帯生態学会 Japan Society of Tropical Ecology February 25, 2012

インドネシアにおける フィールドワーク
【3 ページ】

インドネシアの泥炭湿地林において、長期調査を継続している嶋村鉄也さんの記事を掲載しました.

掲載記事

1 JASTE22 のお知らせ
2 REDD プラス関連文献リスト
3 嶋村鉄也 インドネシアにおけるフィールドワーク
7 年次大会アナウンス

JASTE22 のお知らせ

第 22 回日本熱帯生態学会年次大会(横浜)

日程:2012 年 6 月 15 日(金) 午後―編集委員会, 評議会
6 月 16 日(土) 午前―研究発表会, 総会
午後―吉良賞授賞式・講演, 懇親会
6 月 17 日(日) 午前―研究発表会
午後―公開シンポジウム

会場:横浜国立大学常盤台キャンパス(全プログラム)
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1

大会事務局:
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2
横浜国立大学大学院環境情報研究院 持田研究室内
第 22 回日本熱帯生態学会横浜大会事務局(JASTE22 事務局)
jaste22.yokohama@gmail.com TEL/FAX: 045-339-3414(持田研究室)

公開シンポジウム:
テーマ:熱帯における生物多様性と生態リスク(仮題)

研究発表会は, 日本語と英語の 2 会場に分けて行います. 参加申し込みなどの詳細については, 本ニューズレターおよび大会ウェブサイト http://vege1.kan.ynu.ac.jp/jaste/ をごらんください.

日本熱帯生態学会公式ホームページ移転のお知らせ

現在, 日本熱帯生態学会のホームページサーバーとなっている国立情報学研究所「学協会情報発信サービス」が平成 24 年 3 月 31 日をもってサービスを停止するにあたり, 日本熱帯生態学会公式ホームページを以下のサイトへ移転しました.

日本語サイト http://www.gakkai.ac/jaste/
英語サイト http://www.gakkai.ac/jaste/oshirase/

最新情報については, 新サイトをごらんください. (広報幹事:北村俊平)

REDD プラス関連文献リストと我が国関係者による REDD プラス関連事業一覧表の紹介

藤間 剛・相川真一（森林総合研究所）

Lists of literatures and projects on REDD-plus

TOMA Takeshi & AIKAWA Shin-ichi (Forestry and Forest Products Research Institute)

はじめに

本ニューズレター前号では，吉良先生の著作集にかこつけて REDD プラスと森林総合研究所 REDD 研究開発センターの活動を紹介させていただいた．今回は，REDD 研究開発センターの普及啓発業務の一環として実施中の REDD プラスに係る情報の集約とその公開について，紹介させていただく．

我が国事業者による REDD プラス関連事業一覧

気候変動緩和策の一つ REDD プラス（途上国の森林減少と森林劣化に由来する排出削減，森林炭素の保全，持続的森林経営，森林炭素蓄積の強化）は，気候変動枠組条約締約国会議において，国レベルでの枠組として実施にむけた議論が続けられている．また国際交渉と並行して，国レベルでの森林炭素モニタリングシステムの整備，二国間合意に基づく排出枠取引を目標とする取組，自主的な炭素市場で排出削減量を取引するための取組，特定の森林の保全や地域の人々の生計向上などを目的とした取組など，さまざまな活動やそれらに貢献する実証調査や研究開発が行われている．

REDD プラスの実施にむけた活動は，国際機関，各国政府をはじめとする公的機関，民間企業や NGO，大学や研究機関など，さまざまな実施主体によりおこなわれており，日本に本部をおく組織や団体によるものだけでも，全体像を把握するのが困難な状況になりつつある．REDD プラスの実施にむけた取組で得られつつある知見を共有・活用するための一助として，我が国事業者による REDD プラス関連事業の一覧表を作成した．

一覧表に収録したのは，我が国に本部を置く組織や団体による REDD プラス関連事業のうち，インターネット上に情報が公開されている事業である．主なものに，環境省による新メカニズム実現可能性調査および環境研究総合推進費，経済産業省による地球温暖化対策技術普及等推進事業，JICA（国際協力機構）の技術協力プロジェクトおよび個別専門家派遣事業，ITTO（国際熱帯木材機関）の REDDES パイロットプロジェクト，林野庁補助事業，などがある．今後はこのような政府予算による活動に加え民間団体による自主的な取組に関する情報の充実をはかりたいと考えている．

一覧表はエクセルで作成し，それぞれの事業毎に，事業（予算）名，実施省庁，案件名，開始年，終了年，実施国，我が国の実施機関（団体），概要，関連 URL などを含んでいる．事業名，案件名の区分は便宜的につけているだけのものもある．また概要についてはインターネット上の情報の一部を要約として収録した．この一覧表により，日本の誰がどこでどのような REDD プラスに向けた取組をしているのかを，おおまかにつかむことが出来る．さらに詳細報告書が公開されているものは，関連 URL にダウンロード先を収録してあるので，詳細な情報を得ることが可能である．

文献リスト

REDD 研究開発センターでは，国内外で大量に発表される REDD プラスに係る情報の集約・データベース化を進めている．データベースに登録された文献・資料のうち，インターネット上で公開されているものと，リクエストに応じて REDD 研究開発センター提供できるものを，REDD 関連文献リストとして整理した．

文献リストでは，文献毎に主著者名，副著者名，タイトル，発行年，掲載誌，巻・号・ページ番号，概要， コンテンツリンク先，キーワード，メモ等を入力している．森林総合研究所職員による学術論文など，WEB 公開されていない文献で，REDD 研究開発センターを通じて提供できるものについては，そのことをメモ欄に記している．この文献リストでは，英語文献の概要に日本語による要約をつけたものが少なからずあるので，文献のあたりをつけるのにご活用いただければ幸いである．

情報提供のお願い

本稿で紹介させていただいた，REDD プラス関連事業一覧および文献リストは森林総合研究所 REDD 研究開発センターウェブサイト

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/redd-rdc/ja/>からダウンロードできます．

REDD プラスに関連する事業や文献は日々増え続けているのが現状で，REDD 研究開発センターのみで把握しきれるものではないため，熱帯生態学会会員の皆様からの情報をお待ちしています．

インドネシアにおけるフィールドワーク

嶋村鉄也（愛媛大学農学部）

Field work in Indonesia

SHIMAMURA Tetsuya (Faculty of Agriculture, Ehime University)

はじめに

筆者はこれまで，インドネシア，スマトラ島リアウ州とボルネオ島中央カリマンタン州の泥炭湿地林において長期調査を行ってきた．1998 年～1999 年にかけてインドネシアは激動の年であり，私がはじめてインドネシアに到着した1999年10月はジャカルタにおいてデモが頻繁に行われていた年である．到着したその日にもデモが行われており，象がジャカルタ中心部を行進していたのはいまだに鮮明に記憶にのこっている．そして，その 2 日後の国会での選挙において，ワヒド氏がメガワティ氏に勝利し大統領となった．このように政治的にも経済的にも不安定であったインドネシアで，右も左もわからない大学院生として暗中模索の日々を送っていた．当時，単独でフィールドワークを行うことは当然のことだと思っていたが，他の研究者のフィールドワークを目にするうちに，それが当たり前ではないと思うようになってきた．大学教員という立場でフィールドに行けば，地元研究者からは丁重な扱いを受けるため，多くのことがスムーズに進む．もちろん，学生を連れて行けば，少なくとも我々がいる間，学生達は同様の待遇をうける．しかしながら，大学院生の頃のような無駄なことに満ちた刺激的な日々というものから遠ざかってしまったと思うと同時に，学生を連れて行くことによって彼らが刺激をうける機会を逃してしまっているのではないかと思うようになってきた．そのため，私が大学院生時代にフィールドで経験したことの一部でも書き記し，スムーズに進まない無駄なことに満ちあふれたフィールドワークからも得るものがあるということを書き記す必要性を感じた．もちろん，私の先輩筋にあたる西村千氏・加藤剛氏や，同世代の小泉都氏・鮫島弘光氏らの経験と較べると私のそれなどとるにたらないものであるが．

一般に，自然科学系の大学院生が単独で長期調査を行う場合には，ワーカーを複数雇う必要があったり，高価な機材を大学から借用し利用したりするため，地元民から実際以上に金を持っていると思われ金銭的な軋轢が生じやすい．教員が同行しているときと，単独で行動しているときでは，地元の研究者達の態度が大きく変わったりすることもある．また，調査が順調にすすんでいなくても誰にも相談することもできず，ストレスが溜まりやすい．このような環境において身につけた能力というものは，もちろん論文になるようなものではないが，後々のフィールドワークにおいて役に立つ能力であることが多いと思われる．アクション別フィールドワーク入門（武田・亀井 2008）によると，このような能力はフィールドワークにおける余技であり，これまで武勇伝という形で語り継がれるものであったとされている．本稿では，インドネシア研究者が直面する調査許可取得手続きという非常に面倒な手続きや，大学院生時代に行っていたスマトラでの経験について述べることで，一見無駄なことがフィールドワークの余技を身につけるのに役に立っているということを記し，熱帯研究を志す学生の一助としたい．余談ではあるが，ここに記されたことは，私が調査を行うにあたって様々な困難に直面しインドネシアが大嫌いとなっていた頃の話である．

インドネシアにおける調査許可の取得

インドネシアで調査を行う場合に真っ先に問題となるのが，調査許可の取得である．調査許可の手続きは，日本のお役所に慣れきった我々には複雑怪奇・不可解でまことに理不尽なものと感じられること間違いなしである．調査許可を申請するために，カウンターパートおよび，領事館からの推薦書を取得したうえで，インドネシアへ調査許可を申請する．そして，調査許可がおりてビザを取得し入国しても，約 1 週間ジャカルタで諸手続に追われる．地方で調査する場合には州やそれ以下の行政レベルでの手続きも必要となり，それぞれ数日必要となる．さらには，一時帰国や帰国をする際にも手続きは必要で数日～1 週間を必要とする．こんな事をやっていると，2 週間程度の出張ではデータを取得するのが不可能となる．まことに困った問題である．

私が大学院生時代には外国人の調査許可の審査は LIPI（Lembaga Ilmu Pengetahunan Indonesia: Indonesian Institute of Science）という機関で行われていたが，現在は RISTEK（Kementerian Riset dan Teknologi: The State Ministry of Research and Technology, Republic of Indonesi）という機関が窓口となっている（写真 1）．注意して欲しいのは，ここで窓口と書いたことである．10 年前は LIPI の研究者をカウンターパートにしたり，調査許可を受け付けている部局の人々と仲良くなっていたりすると，調査許可がスムーズに出たが，RISTEK が窓口とな

っている現在では RISTEK はあくまで窓口であり，調査許可の認可はジャカルタにある BPPT（Badan Pengkajian dan Penerapan Teknologi: The Agency for The Assesment and Application of Technology）の建物で毎月開かれる会議で決定される．この会議では，内務省・法務人権省・林業省・農務省・文部省・宗教省・保健省をはじめとする多くの省庁から役人達が参加し，個々の研究計画がインドネシアの国益を損なわないかどうかを審査する．そのため，RISTEK の人々と仲良くなっても，昔ほどはスムーズに調査許可がおりない．実際，RISTEK の窓口の人々は事務レベルでは非常に親身になってくれていたにも関わらず，調査許可がスムーズにおりなかったこともあった．

インドネシアにおける調査許可の取得手続きの詳細については RISTEK のホームページ

（ http://www.ristek.go.id/index.php?module=File&frame=lain_lain/frp/frp1.html）に掲載されているのでそちらを参照されたい．また，日本人がインドネシア調査許可を取得した事例がウェブ上にアップされつつある．複数の事例が載っているものとしては，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の地域変動論講座のホームページ上に掲載されている「インドネシア：調査の手続きーその事例集

（http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/asia/chiiki/instances01.html）」などがある．ここには，私を含む複数の研究者が，調査許可を取得するまでのプロセスを書き記している．これを読めばわかるが，インドネシアに入国後の手続きは，それぞれの立場，研究テーマ，調査地などで入国後に必要となる手続きが大幅に変わり，臨機応変に対応しなければならない．当然のことであるが，この手続きに関してインドネシアの研究者に問い合わせても大多数の人はこの手続きの詳細を知らない．在日外国人が日本でするべき手続きについて我々が知らないのと同じことである．

この複雑怪奇なシステムは，日本のシステムに慣れきった研究者にとってはまことに理不尽なものである．しかるべき手続きに従って，お役所に行っても手紙を一枚もらうのに数時間～数日待たされることもある．しかしながら，これらの手続きをスムーズにこなすために試行錯誤することによって得るものも多い．役人達の仕事に対する姿勢，彼らとの交渉術やものの考え方など，アンテナを拡げておけば多くのことを身につけることが可能である．さらには，タクシーなどでなくトランスジャカルタやアンコタをはじめとする公共交通手段を利用してお役所を巡れば，インドネシアのシステムの一端に触れることができることとなろう．ある若手院生達は専属のオジェック（バイクタクシー）を雇ってお役所を巡り，ジャカルタに詳しく

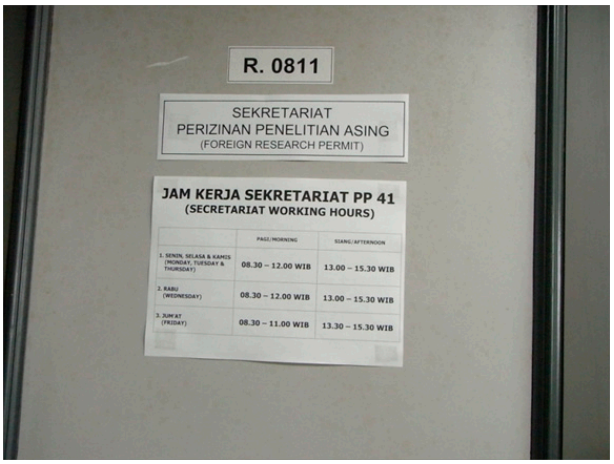

写真 1. BPPT ビル内にある外国人調査局のドア．調査許可を申請する誰もが最初に目標とする場所．

写真 2. 筆者がスマトラで住んでいた小屋．現在この家は，解体され H 氏の住宅の一部となっている．

なっていく．一部のインドネシア研究者の間では，この手続きを一人で行うことがインドネシア研究者となる必須条件であるかのように語られることもある．これについては，手続きを経験してインドネシアに対して理解を深めるべきであるという側面もあると同時に，自分が経験した苦労をお前も共有したら認めてやるという側面もあるに違いないと私は思っている．かくいう私もそう思っている一人である．

スマトラ島におけるフィールドワーク

私がはじめて海外に長期滞在したのは 1999 年～2000 年のことである．場所はスマトラ島リアウ州にあるカンパール川の支流であるクルムタン川流域である．現在では，道路網も発達し，携帯電話なども通じる場所となっているが，当時は非常にアクセスが悪く，州都プカンバルからは車・スピードボート・小舟を乗り継いで 6～8 時間ほどかかる場所にあり，陸の孤島といっても差し支えがない場所であった（写真 2，図 1）．このような場所で単

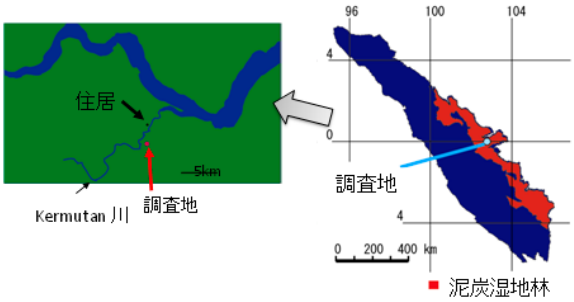

図 1. スマトラ島カンパール川支流クルムタン川流域の調査地の地図.

独調査を行うことは，私のように不勉強で学部を卒業したばかりの学生には少々荷が重すぎた．もちろん，それらの経験を通じてアカデミックな意味で得たものは多かったが，それについては過去にエッセイを書いたのでここでは割愛する（嶋村 2007）．

当初，ここでの調査は様々な理由から困難を極めた．その理由としては，私自身が地元民に対して無理解であったことが挙げられる．中でも，もっとも私を困らせたのが居住地から調査地へのアクセスの問題である．私が居住しているところから調査区へと行くためには，船で 20 分ほど川を上る必要があり小船を購入したが，私が雇っていたワーカーの親類が勝手に船を使用する上にエンジンを壊してしまうのである．中古の壊れやすいエンジンを購入した私も無知極まりなかったのであるが，3 ヶ月もの間最低限の調査しかできない時期が続いた．村や街へとなんとかしてエンジンを運び，修理をしてはまた壊されるという日々が続いた．エンジンの修理や移送のために調査費用はどんどん減っていき，データは全くとれないという状況の中でイライラし尊大な態度をとる当時の私と，のらりくらりと言い訳をしてはエンジンを壊す彼らとの仲は日々悪化していき，私はどんどん孤立し，雇っていたワーカーの何人かは離れていった．時には大喧嘩をして首に鉈をつきつけられたこともあった．今にして思えば，彼らの物事に対する考え方をもっと理解して行動をすべきことはあきらかなのであるが，血の気が多かった私にとっては頭では理解できていても行動することは不可能であった．そんな中でも，私のそばに最後まで残ってくれていた H 氏に，もっと給料がいい仕事があるのに，何故お前は俺についてきてくれるんだと尋ねたことがあった．彼の答えは一言であった．「Saya kasihan kamu（私はお前に同情している）」と．この言葉は当時の無知で尊大な私にとっては衝撃であった．いろいろな面で恵まれていると思っていた自分が彼らに同情することはあれ，彼らに同情されることはないと思っていたからである．これ以降，私は態度を改めると同時に，なけなしの奨学金をはたいて新たに船体とエンジンを新品で購入することとなった（写真 3）．

写真 3. クルムタン川と 2 代目の船.

写真 4. 素手で捕まえた蠍の針を外したうえで、もて遊ぶ B 氏．彼は調査中にヴァイパーなどを素手で捕まえてきては見せびらかしたりする．

日本的な勤勉を彼らに押しつけることもやめ，彼らのペースにあわせた調査を行う術も身につけていった．そして，スケジュール通りにデータを取ろうとすることをあきらめた．すると不思議なことに，無理にスケジュール通りに物事を運ぼうとしていたときよりも，様々なことがスムーズに運ぶようになっていた．そして彼らとの仲も徐々に改善していった．今にして思えば，フィールドワークの「無駄」というものを楽しむようになってきた時期だったのであろう．彼らの水田について行き農作業を手伝ったり，雨季に漁撈を行う場所に行って彼らの漁撈について学んだりもし，徐々に良い思い出が増えていった．村のサッカー大会に出場して 9－0 で負けたこともあった．私はこの試合では FW として前線にいたのだが，前にいてもボールが来ないし，ボールをもらいに下がれば味方に怒られるという状況であり殆どボールにさわることもなかった．その後は，友人に会う度に「Sembilan kosong（9－0）」と馬鹿にされ続けた．外国人助っ人として役には立たなかったが，それなりに村の話題になったのではと自負している．

と，数々のよい思い出と経験を積み重ねていったが，博士論文執筆後は，ポスドクとして国内の仕事が中心になりスマトラからは足が遠ざかってしまった．その間，当時の研究指導者であった故百瀬邦泰氏と作成した 7 つの調査区のうち 6 つはアブラヤシのプランテーションへと代えられてしまっていった．これはよくある話で悲しい出来事ではあるのだが，私はあくまでよそものであり，研究のために彼らの土地利用に口を挟む権利はないと自分に言い聞かせて，今後はアブラヤシプランテーションの研究をやろうと決意を新たにしたのだが，今現在に至るまでこの決意は実現されていない．

おわりに

筆者はこの後 2007 年より故百瀬邦泰氏の遺言に従って，中央カリマンタン州へと主なフィールドを移すこととなる．この頃になると，スマトラでの試行錯誤の頃と違い，フィールドワークにおける無駄を楽しみ過ぎるという悪癖が身についてかなり無駄と思われることも沢山経験した．ここでは，蠍に刺されたり（写真 4），熊に食料を奪われたため食料を泥炭湿地林内で調達する必要にせまられたり，地元民たちにとって神聖な林分（論文執筆のためにはあまり重要ではない林分）でプロットを作成したりと，いろいろと無駄な経験をした．これらの経験も，非常に新鮮で驚きに満ちたものである一方で，フィールドワーカーとしてある程度成熟してしまったためか，スマトラ時代ほど無駄から学ぶこともなくなってしまった．しかしながら，中央カリマンタンにおいて一つだけ自覚したことがある．現地大学のスタッフと行動を共にしている限りにおいては，行動範囲はそのスタッフの能力の範囲内に限られる．しかしながら，森を熟知した地元民と行動をしている場合はその範囲は拡大し，貴重な経験ができたり，貴重なデータを取得したりすることができるということである．私の調査に対してカウンターパートの研究者である S 氏が，幸か不幸かアカデミックスタッフをつけてくれなかったのである．振りかえると，スマトラでも地元民と行動をともにしていなければ取得出来なかったデータは多数あった．彼らとともにデータを所得できたのはある種の幸運であった．いずれにせよ，まだまだ学ぶべきことは昔ほどではないが多くありそうである．最後に，ここで述べてきたような経験というものは一見無駄なようだが，様々なことを学ばせてくれただけでなく，ある程度年齢を重ね，大学教員という立場になった私では経験したくてもできなくなってしまったものとなってしまっている．その意味では，はじめてのフィールドワークに立ち向かう学生達をうらやましくも思い，四苦八苦している姿をみるとニヤニヤしながらエールを送りたくなってしまう．過去に私をスマトラに置き去りにした大先生方もニヤニヤしていたに違いない．

参考文献

嶋村鉄也　2007.　*発想の卵「ひとりでがんばる」*. 水環境・水資源学会誌 20:127

武田丈，亀井信孝（編）2008.『アクション別 フィールドワーク入門』京都:世界思想社

RISTEK “Research procedures for foreign university, research institute, enterprise and foreign national in Indonesia” http://www.ristek.go.id/index.php?module=File&frame=lain_lain/frp/frp1.html 2012 年 2 月 3 日アクセス

インドネシア：調査の手続きその事例集 http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/asia/chiiki/instances01.html 2012 年 2 月 3 日アクセス

第 22 回 日本熱帯生態学会年次大会案内

学会会長:山倉拓夫
年次大会実行委員長:持田幸良(横浜国立大学大学院環境情報研究院)
年次大会事務局長:金子信博(横浜国立大学大学院環境情報研究院)
大会事務局:小池文人, 大野勝弘, 若松伸彦, 古川拓哉

日程: 2012年 6月15日(金) 午後―編集委員会, 評議会
6月16日(土) 午前―研究発表会, 総会 午後―吉良賞授賞式・講演, 懇親会
6月17日(日) 午前―研究発表会 午後―公開シンポジウム
＊ポスターセッションも行います(日時はウェブサイト等でお知らせします).

会場:横浜国立大学常盤台キャンパス(全プログラム) 〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1

大会事務局:〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
横浜国立大学大学院環境情報研究院 持田研究室内
第22回日本熱帯生態学会横浜大会事務局(JASTE22事務局)
jaste22.yokohama@gmail.com TEL/FAX: 045-339-3414

公開シンポジウム:熱帯における生物多様性と生態リスク(仮題)
日時:2012 年 6 月 17 日 (日) 13:30-16:30
会場:横浜国立大学常盤台キャンパス
私たちの生活は, 熱帯林の恵みにさまざまな形で関わっています. 特に森林資源や農産物の利用は, 熱帯林の保全に深く関係しています. 国際貿易を続けるなかで, 消費者の意識や行動が多様性保全の正否と結びつくことが明らかとなっています. しかし, どの森林を, どのような理由で, そしてどのような方法で保全するかを一般の消費者に伝えるには, まだ情報が不足しています. 本シンポジウムでは, 熱帯林の生物多様性に与えるインパクトの評価指標の開発と, 想定されている生態リスクの評価について先進的な取組をされている研究者, NGO, 企業の方々に話題提供をお願いします. 日本で暮らす私たちの行動が, 熱帯林の保全とどう関係があるのかを考えるきっかけになることを期待しています.

参加申し込み:
ホームページ(http://vege1.kan.ynu.ac.jp/jaste/)から参加申込書をダウンロードし, 必要事項を記入の上JASTE22事務局に送付願います. 電子メールを使用し, やむをえない場合には郵送またはFAXを使用してください. ただし研究発表する方は, 申込書・講演要旨ともFAXを使用しないでください. 郵送の場合は, デジタル版をCDにて送付してください. 申込書の全ての事項に, 漏らさず記入してください. 今大会では, 研究発表を日本語と英語の2会場に分けて行うため, 口頭発表をされる方は申込書で言語を選択してください. なお, 発表者は会員に限ります. 研究発表を希望する非会員は学会事務局に連絡し, 事前に会員登録を行なってください.

講演要旨:
研究発表をされる方は, 講演要旨をA4用紙1ページにまとめ, 参加申込みと同時にお送りください. ファイル形式はMS Word(.docまたは.docx)を用いてください. 講演要旨は, 以下の様式で作成願います(そのまま印刷します).
・余白は, 上下, 左右とも25 mm.
・タイトル行(第1行)と氏名・所属行(第2 行)は, さらに25 mm下げる(用紙左端から50mm)
・発表者の氏名の左上に○をつける.
・本文は氏名・所属行の後に1行あけて印字する.
・図表は白黒とし, 余白からはみ出さないように貼り込む.

参加費:

前納大会参加費:5,000 円(一般)／2,500 円(学生) ※当日納はそれぞれ6,000円／3,000円
前納懇親会費:5,000 円(一般)／2,500 円(学生)※当日納はそれぞれ6,000円／3,000円
講演要旨集のみ希望:2,000円(大会後郵送いたします)

◇郵便局から郵便振替:

※青色の払込取扱票を使用してください.
※払込取扱票の通信欄に, 必ず送金内訳(一般／学生の別, 参加費／懇親会費／要旨集代の別)を記載してください.
口座記号番号:00220-0-140609
口座名称(漢字):日本熱帯生態学会横浜大会実行委員会
口座名称(カナ):ニホンネッタイセイタイガッカイヨコハマタイカイジッコウイ

◇他の金融機関等からの振込み(インターネット・バンキングも可):

※参加申込書と「同じお名前で」, または「同じお名前の口座から」振り込んでください.
店名(店番):〇二九(ゼロニキユウ)店(029)
預金種目:当座
口座番号:0140609
受取人(漢字):日本熱帯生態学会横浜大会実行委員会
受取人(カナ):ニホンネッタイセイタイガッカイヨコハマタイカイジッコウイ
・前納された費用はお返しできませんが, 当日欠席された方には講演要旨集を1部お送りします.
・費用前納に係る領収書は, 「払込取扱票の受領書」もしくは「銀行等の受取書／領収書」をもってかえます.

申込締め切り:

参加申し込み, 講演要旨の送付, 参加費・懇親会費の前納は, すべて**2012年4月20日(金)17時必着**とします.

編集後記

昨年からの懸念事項であった学会公式ホームページのサーバー移転作業がようやく完了しました. 新しいサイトでもこれまで同様に会員からの最新情報を募集しておりますので, ぜひ活用してください. (北村俊平)

このニューズレターのバックナンバーは, http://www.gakkai.ac/jaste/nl/からダウンロードできます.
ニューズレターへの投稿は, 編集事務局 : 北村 (kitamura@hitohaku.jp) へ

日本熱帯生態学会事務局
〒558-8585
大阪市住吉区杉本 3-3-138
大阪市立大学理学研究科植物機能生態学 (気付)
日本熱帯生態学会事務局
Tel & Fax: 06-6605-3167
E-mail: jaste.adm@gmail.com

The Japan Society of Tropical Ecology
c/o Laboratory of Plant Ecology, Graduate School of Science, Osaka City University
3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi-ku, Osaka 558-8585, Japan
Tel & Fax: +81-6-6605-3167
E-mail: jaste.adm@gmail.com

日本熱帯生態学会ニューズレター **86 号**

編集 日本熱帯生態学会編集委員会
NL 担当 : 北村俊平 (兵庫県立人と自然の博物館)
市川昌広 (高知大学農学部)

NL 編集事務局
〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目
兵庫県立人と自然の博物館
自然・環境マネジメント研究部
電話 079-559-2001, ファックス 079-559-2007

発行日 2012 年 2 月 25 日
印刷 土倉事務所 電話 075-451-4844